

税が拓く、夢への入り口

京都市立西京高等学校附属中学校 3 年 荒谷 心琴

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無料で支給されています。」

教科書の裏に小さく印刷されたこの言葉を、私は今まで何気なく読み流していた。しかし、ある日ふとその一文が目にとまり、頭の中で何度も繰り返されるようになった。無料であるはずの教育も、実は誰かがその費用を負担している。その費用は税金によって賄われているのだ。

私は幼い頃から教師になることが夢であり、教える立場から子供たちの未来を支えたいと考えている。しかし、夢を実現するには、教育の現場だけでなく、その背景にある仕組みや支えについても知る必要があると感じた。そして、その鍵となるのが「税金」だと気づいた。これまで当然のように受けてきた教育は、どのように支えられているのか。私は教育と税の関係について調べてみることにした。

調べていく中で、驚くべき事実が分かった。国や地方が負担している公立小学校の生徒一人あたりの年間教育費は約九十四万円、公立中学校では約百八万円にもなるという。単純に計算すると、私は中学三年生になるまでに、約七百八十万円もの教育費を国や地方に負担してもらっていたことになる。そのお金は、教科書やパソコン、実験器具などに使われているほか、教師への給料にも充てられている。つまり、私たちの学校生活は、ほとんど税金によって支えられているのだ。

では、その税金はどこから来るのか。それは、私たちが日々払っている消費税や所得税、住民税などから集められている。ここで、ふと疑問に思った。「私のように教育を受けている人は税金の恩恵を受けているけれど、もう教育を必要としない大人たちは、税金を払いたいと思うのだろうか」と。もう一度、教科書の裏を見てみた。「これからの日本を担う皆さんへの期待」——。この言葉に、私ははっとさせられた。私たちは未来の日本をつくっていく存在として、大人たちからの期待支援を受けているのだ。そのことに気づき、少し嬉しい気持ちになったと同時に、「期待されている分、しっかり学ばなければ」と思った。これまで私は税に対してあまり良いイメージを持っていなかったし、なんとなくで払うものだと思っていた。しかし、教育という側面から税を見つめ直してみると、それは私たちの未来をつくるための、なくてはならない仕組みだと気づかされた。

将来、私は教師となり、子供たちの教育に深く関わることで、次の時代を担う若者たちの未来を共に築いていきたいと考えている。これまで自分が多くの人々から支えられてきたことを忘れず、その恩に報いるためにも、教育という道を通して社会に貢献していくつもりだ。また、これから税金を払うときには、「日本の未来を支える行為」であるという意識を常に持ちながら納税していこうと思う。